

随 想

フジコー技報第 29 号によせて

公益財団法人北九州産業学術推進機構
 中小企業支援センター
 中小企業・ベンチャー支援部長



滝本 豊樹
 Toyoki Takimoto

この度、フジコー技報第 29 号に随想を書かせていただく機会を頂戴し、誠にありがとうございます。

私は、現在、公益財団法人北九州産業学術推進機構中小企業支援センターにおいて、中小企業やベンチャー企業の皆様をご支援する業務に携わらせていただいております。フジコー様の事業についても微力ながら少しお手伝いをさせていただいていることもあり、そのようなご縁で、今回この随想寄稿の機会を頂戴することとなりました。

今年（2021 年）は、1964 年以来 57 年ぶりに東京で夏季オリンピック・パラリンピックが開催された年となりました。一方で、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい続けた年でもありました。コロナの収束がなかなか見通せず、本来であれば前年（2020 年）に開催されるはずであった東京オリンピック・パラリンピックは、開催が 1 年延期されるという異例の事態になりました。国内では感染のまん延とともに医療が逼迫、複数回に渡り緊急事態宣言が発出され、多くの人々の行動や企業活動にも制限が加えられ、各地のイベント等も次々と中止となっていきました。そして、開催都市に決定した時には国中があれほど歓喜し、本来であれば多くの方がその開催を祝い、選手の活躍や観戦を楽しみにしたはずの東京オリンピック・パラリンピックでさえも、開催そのものの是非について、世論を二分するような対立構造になってしまいました。私自身、個人的には東京オリンピック・パラリンピックを楽しみにしていた一人でもありましたので、このような流れは非常に残念でした。

しかしながら、多くの関係者の努力のおかげで（新型コロナまん延防止の観点から原則無観客と

いう方式にはなりましたが）、なんとか今回のオリンピック・パラリンピックは無事開催にこぎつけることができました。そして実際に大会が開催され、各競技で日本選手の活躍を目にすることで、開催の是非について肯定的な意見が多く聞かれるようになっていったのは、出場された選手の皆さんにとっても大会そのものにとっても、本当によかったと思います。

私もテレビで多くの競技を観戦し、連日の日本選手の活躍に大いに心を躍らせました。日本のお家芸柔道は、連日のメダルラッシュとなり、一競技だけで二桁のメダルを獲得、阿部一二三選手・詩選手の兄妹での金メダル、大野選手の圧倒的存在感、初めての団体戦など、話題性も十分でした。レスリングでも同じく川井梨紗子選手・友香子選手が姉妹で金メダルを獲得しました。水谷・伊藤ペアをはじめとした、石川選手・平野選手などの卓球の大活躍、女子ソフトボールの上野選手・後藤選手の息詰まるような投球やチームプレイ、後藤選手はその後の金メダル報告で名古屋市河村市長にメダルをかじられ変な話題を提供することになりましたが、これはまた別の話として・・・野球での地元ソフトバンクホークスの選手たちの活躍もうれしかったですし、女子バスケの活躍も印象的でした。ボクシングの入江選手の天真爛漫な明るさ、体操やバドミントンにおける内村選手あるいは桃田選手という絶対的エースが敗退した後の他の選手たちの頑張りも見事でした。

パラリンピックでも、テニスの国枝選手の王者の風格漂う堂々たる勝ちっぷり、車椅子バスケットや車椅子ラグビーなどオリンピックにはない競技性や迫力を垣間見ることもできました。そのほかにも多く

の印象的な場面が様々ありました。

そしてそのような中でも、私にとって最も心に残ったのは、今大会の最終日に行われたパラリンピック女子マラソンの道下美里選手の金メダルでした。前回のリオパラリンピックで銀メダルだった彼女が、5年の歳月をかけて「忘れ物を取りに来ました。」と宣言して本当に手にした金メダル。ブラインドランナーの彼女が伴走者とともに繰り広げた「チーム道下」としてのレース、30km 過ぎに満を持してロングスパートをかけ、みごとにライバルを振り切ったレース展開は、まさに金メダルに向けて勝つための戦いを挑み、チームの力で勝ち取った本当に素晴らしい勝利でした。道下選手の話によれば、30km 過ぎまで並走していたロシアのパウトワ選手を引き離す際、相手のペースがやや鈍ってきたことに気づいた伴走者の志田選手が、ここが仕掛けどころと判断し、「いけるか？」と声をかけたそうです。道下選手はためらいなく「いける！」と即答、二人の思いとタイミングがぴったりと合致し、あのようなレース展開ができたそうです。

今大会、道下選手には2名の伴走者がついていましたが、前半の伴走者である青山選手は、道下選手が後半に勝負できるよう、その準備のためできるだけ押さえ気味に走ることに努め、後半の伴走者の志田選手は勝負ポイントを見極め、彼女を金メダルへのフィニッシュへ導く。そして道下選手はこの2人のガイドランナーを信じ切り全力で走り抜く。まさに「チーム道下」として3人が一体となって勝ち取った勝利でした。

私自身、ランニングを趣味にしていることもあり、また練習中の道下選手と福岡市の大濠公園で少しご一緒させてもらったことや、いくつかの大会で同じレースを走ったこともあることなどから、道下選手に対しては他の選手以上に親しみを感じ、応援していましたので、この金メダルは本当に嬉しかったです。

道下選手は、明るく朗らかで笑顔のとても素敵な女性です。また、アスリートとしては大変小柄で、身体的にそれほど恵まれている訳ではなく、世界の頂点に立つためには大変な苦勞と血の滲むような努力があったと思います。そんな道下選手がパラリ

ンピック後のテレビのインタビューでこのような趣旨の事を話していました。

小学生の時に角膜の病気にかかり、中学時代に右目を失明、25歳で左目もほとんど見えなくなってしまったとの事ですが、それについて「目が見えなくなって、できることがどんどん少なくなっていました。でも一人でできないことは二人でやればいい。二人でできないことは三人でやればいい。仲間がいれば可能性は無限大です。」この話を聞いたとき、本当に素晴らしい言葉だと思いました。

また、今回のパラリンピック出場にあたり、道下選手は国内外の方々から7000通を超える応援メッセージをもらったそうです。あふれるほど届いたメッセージを受け取ったこと、多くの方が励ましてくれることは心からうれしかったのですが、目の見えない彼女は当然それらのメッセージを自分で読むことができません。「せつかくもらったメッセージなのに読めないことが寂しい。」と思っていたところ、旦那さんをはじめ多くの仲間たちが、すべてのメッセージを音声にしてくれたそうです。そして道下選手は、パラリンピック前にそれらの応援メッセージをすべて聞くことができ、それらの方々の思いを心に受け止めてレースに臨んだという事です。

道下選手の金メダルは、まさにこのような仲間たちがいたからこそたどり着くことができたものであり、きっとそこには、目の見えない道下選手だからこそ見る事ができた最高の光景があったのではないかと思います。今回の東京パラリンピックには、一つの例として、このような「チーム道下」の物語がありました。

一方で、もしもコロナがなかったならば、今回のオリンピック・パラリンピックはどのようなものだったのだろうか、とも考えてしまいます。きっと多くの日本人が心の底から応援し、もっともっと楽しむことのできた大会になっていたのではないのでしょうか？そのようなことを考えると、フジコ様が取り組まれておられる光触媒技術が、一刻も早く新型コロナウイルス感染症解決の一助となる事を願わずにはられません。大変タフな戦いになるとは思いますが、御社の益々のご活躍を心からお祈り申し上げます。